

イ

ツ

キ

森川市市政 100 周年記念 森川劇場公演（朗読劇）

イツキ

2019 年 9 月 22 日（日曜日） 15 時開演

森川市民会館 小ホール （入場無料）

16 世紀末の中浦（現在の森川）、領主中浦村井家と材木商富田家に抗った百姓一揆とその後の物語

作・・・・・・・・・・瀬戸志郎

高崎次郎・・・・・・・・町田 優

高崎サナ・・・・・・・・川口有希

黒川久右衛門・・・・山本 宙

矢野忠治・・・・・・・・村山明子

末次兵六・・・・・・・・佐藤耕介

百 姓・・・・・・・・石田 健

百 姓・・・・・・・・香田幸子

音 響・・・・・・・・守野彬雄

照 明・・・・・・・・鮎田 信

本公演は森川市等の公的機関や団体・企業からの支援を受けていない、個人の有志が手作りで行う公演です。ご賛同をいただける皆さまには、ホール入口の投銭箱へのご寄付をお願い申し上げます。皆さまから頂戴したご寄付は、ホール及び設備の使用料（73,000 円）に充当し、残額が生じた場合には森川市の市制 100 周年記念事業に寄付致します。

佐藤

「本日は生憎の雨降りとなつてしまいましたが多岐の皆さまのご来場を賜り、誠に有難うございます。開演の時間となりましたが、朗読劇を始める前に、本日の公演について簡単なご紹介をさせて頂きたいと思ひます。

自己紹介が遅れましたが、私は森川高校で国語を教えております佐藤と申します。森川高校には、二〇一四年の夏から二〇一五年の秋まで、一年あまりの短い間でしたが、かつて演劇部がありました。この演劇部を高校一年生のときに立ち上げて、何回かの公演を行った中心的なメンバーが、本日の公演の脚本を書いた瀬戸志郎くん、高崎次郎役を担当する町田優くん、高崎サナ役を担当する川口有希さん、そして残念ながら今回の公演には参加できなかった内浦優子さんの四人でした。

四人は高校二年生のときに森川高校の文化祭で『はなだいろ』という劇の公演を行ったのですが、この時の公演を観て頂いた方から、『とても素敵だったわ。森川市も四年後に百周年を迎えるから、市政百周年記念公演ができればいいのにね』という励ましの言葉を頂いたことが、今回の公演のきっかけになりました。先月、この方とお会いする機会があつて、『四年前に頂いた励ましの言葉が、今回の公演に繋がりました』とお礼を申し上げたところ、『そんなこと言ったのかしら、言ったのよね』と、あまりご記憶にない様子でしたが、当時の演劇部のメンバーは、このときに交わした『大学に入ったら劇団森川劇場を立ち上げて、市制百周年記念公演をやるよ』という合言葉を、演劇部を解散したときや、森川高校を卒業するときにも振り返り、その後も何となく忘れられずにいたそうです。

とはいえ、四人は大学に入ってからそれぞれ別々の道に進み、演劇から遠ざかっていますので、本当に公演ができるとは思っていませんでした。森川市が市政百周年を迎える今年に入り、ゴールデンウィークが近くなつた頃に、突然、瀬戸くんから今回の公演の参加者に脚本の第一稿が配られました。稽古や準備にあまり時間がかからない朗読劇の形になつていて、これで公演を行う現実味が一気に高まりました。

瀬戸くんが書いた脚本は、中浦一揆に題材を取つたものでした。この森川が昔は中浦という地名だったことをご存じの方はいらつしやるかと思ひますが、中浦一揆をご存じの方は少ないと思ひます。戦国時代の末期に、この辺りを治めていた中浦村井家の悪政を正そうとして農民や漁民が立ち上がった百姓一揆が、中浦一揆です。中浦一揆は成功して、中浦村井家の支配を終わらせたのですが、すぐに本家にあたる大浜村井家が中浦を治めるようになり、中浦の地名はこの時に森川と改められました。この中浦一揆については古い資料が残つておらず、詳しい経緯は忘れられています。ですので、瀬戸くんが書いた脚本は、歴史的な事実を踏まえたものではなく、瀬戸くんが自由な想像力を駆使して創り上げた物語だにご理解ください。

本日の公演には、先程ご紹介した脚本の瀬戸志郎くん、高崎次郎役の町田優くん、高崎サナ役の川口有希さんの三人に加えて、森川高校演劇部で音響と照明を担当してくれた守野彬雄くん、鮎田信くんが、後方にある調整室で音響と照明を

担当してくれています。また、森川高校の美術の先生で、演劇部の副顧問だった村山明子先生が矢野忠治の役を、演劇部の顧問を務めておりました私が、末次兵六の役を担当します。

演劇部の関係者以外では、静川沿いで開玄堂という古本カフェを開かれている山本宙さんが材木問屋の黒川久右衛門の役を、南風書店森川店の石田健さんが百姓の役を担当されます。同じく百姓の役を担当する香田幸子さんは、高校時代から川口さんや守野くんとバンドを組んできた仲間で、この三人が今回の公演で演奏される素敵な曲を作ってくれました。

なお、本公演は、森川市政百周年記念公演と銘打っていますが、個人の有志が全くの手作りで行う公演で、森川市や森川高校といった公的な組織からの支援は受けておりません。お手元の簡単なパンフレットにも書かせていただきましたが、朗読劇をお楽しみ頂いた後で、ご賛同を頂ける場合には、ホールの入口に置いてある投銭箱にご支援を頂戴できれば有難く存じます。頂戴したご支援は、このホールや設備の使用料に充てさせていただき、使用料を超える金額については、森川市の市制百周年記念事業に寄付させていただきます。

それでは、前置きが長くなりましたが、朗読劇『イツキ』を始めさせて頂きたいと思えます。どうぞ最後までお楽しみください」

第一章

鮎田 「雨なのにけっこうお客さんが来てくれたよね。百人くらいはいるかな。ここからだと背中しか見えないけど、森川高校の生徒と卒業生、それから親関係、あとは開玄堂や森川書店の常連さんとかかな」

守野 「キャパが三百席だから、まあ百二、三十つてとこじゃない。川口がいろいろ告知とか宣伝とかやってたし。サトコウも学校で声かけたんじゃない」

鮎田 「サトコウが声かけても、来るかな」

守野 「村山さんも、他の先生とかにも伝えてくれたかもね」

鮎田 「まあ、でも、客が入って良かったじゃない。こんな立派なホールでさ、客が五人とかだったら、寂しいよね。それにこの部屋、調整室っていうの、立派だよ。音響卓とか、照明卓とか、機材がまあまあ本格的っていうか、窓から舞台が見えたりして、宇宙戦艦ぼいっていうの、何か気分が上がるよね」

守野 「俺は、こういう機材はバンドのライブとかでも使うことがあるから」

鮎田 「そつか。俺はぜんぜん素人だから、守野に任せていい？脚本は読んだけど、正直、何をどうしたらいいか分かんなくてさ」

守野 「まあ、凝ったことはやらないから、一人で何とかなるけど、当日のリハくらいは来いよ」

鮎田 「ごめん。バイトが抜けられなくて。でも、町田が来ないなら、俺も来なくて許されるかなって思うじゃない」

守野 「まあね」

鮎田 「町田、リハには来なかったんだよね」

守野 「そうね、そろそろサトコウの挨拶が終わるから、仕事しないと。客席の照明を下げるのは、さっき言ったよね」

鮎田 「OK。でも、どうしてサトコウが挨拶するかな。瀬戸が作ったようなものでしょ。なら、瀬戸が挨拶すればいいんじゃないの」

守野 「瀬戸は『今日は客席で観ていたいから』とか言ったよ。ほら、佐藤の挨拶が終わるから、終わったら、1、2、3、4、5のスピードでゆっくり照明下げて、俺が音入れるから、合図したらスポットライトをゆっくり上げて」

薄明りの客席に、ゆっくりと小舟の櫓を漕ぐ音が低く流れて来る。

照明を落とした舞台の中央に設置されたスタンドマイクを中心に、半径三メートル程の半円を描くように五つの椅子が置かれ、下手から上手に向かって、百姓1、百姓2、次郎、忠治、兵六の順に座っている。

立ち上がってスタンドマイクの前に立った次郎に、スポットライトがゆっくりと当てられる。

次郎 「もうすぐ夜が明ける。そのうち山の向こうの東の空が縹色に変わってくる。もうすぐ浜に着く。少し疲れた。かなり沖まで出たし、気が張り詰めて休まる時がない。いろいろと事件が多すぎる。まず、昨日の夜、百姓たちが富田家の店を打ち壊した。農家だけでなく、漁師も少し加勢したらしい。父さんが漁師たちを止

めたのに、何人かは出掛けて行ったと聞いた。だが、富田家の店を打ち壊す気持ちには分かる。あの材木問屋は、木を残らず伐り倒して山を丸裸にしてしまう。そうやってボロ儲けした金を、百姓に高利で貸してまたボロ儲けだ。ここ十年、毎年のように森川が氾濫するのも、魚がひどく獲れなくなったのも、富田家が山を丸裸にしたせいだと皆が言っている。富田の家は自分の儲けしか考えない。それに比べて黒川の家は違う。あそこの主人の久右衛門は、父さんが談判に行ったら、よく話を聞いてくれて、もう五年も前から山に木を植えるようになった。まっとうな材木問屋だ。だから余計に、富田の野郎には腹が立つ。あそこの主人は領主の中浦村井家と結託しているから、打ち壊しにはきつと重いお咎めがあるだろう。しかしだ、お咎めがあるうが、道理に外れた材木問屋を打ち壊すことは正しい。正しいことをしてお咎めを受けた家はみんな支える。それが百姓だ。

だが、解せないのはここからだ。打ち壊しをやった百姓は、富田の店から運び出した錢袋を父さんのところに持ってきて、『この錢をどうしたものか』と相談したという。父さんは打ち壊しとは何にも関係がない。加勢しようとした漁師を止めたくらいだ。確かに父さんは大綱の頭領で人望もあるけれど、打ち壊しの後始末は、打ち壊しをやった奴らがつけるのが筋だ。おおかた、富田の家にあんなに錢があるとは思っていなかったんだろう。運び出してはみたけれど、錢なんて、碌に使ったことがない奴も多いだろうし、みんな山分けするか、どこかに隠しておくか、隠し場所が見付かったらどうするのか、意見がまとまらなかったとしてもおかしくはない。それで、誰が来たのかは知らないけれど、あれだけの量の錢袋を運んできたんだから四人くらいは来たんだろう。それで、父さんと相談をして、頭を捻って捻り出した結論が、錢を海に捨てるっていうんだから、まったくもって解せない。確かに打ち壊しで物盗りをするのはご法度かもしれない。しかし、錢があれば、懐が苦しい家に仕事を出してやることもできる。万一の時に備えて蓄えておくこともできる。父さんは錢を嫌っているけれど、役に立つものなんだから、何も捨てることはないのに、ワレが父さんに起こされて、事の成り行きを聞いたときには、もう錢袋は舟に積み込んであって、百姓たちは帰ったあとだった。舟まで歩いていくと、サナが心配そうな顔をして立っていた。サナは口が利けないけれど、利発で勘が鋭い。死んだ母さんの腹の中から十八年も一緒に生きてきた仲だから、サナが感じていることは何となく分かる。サナには、心配すんなって言ってやった。沖の方を見つめていた横顔が、冴えた月明りに照らされて、この世のものとは思えないくらい美しかった。

沖に向かうときの舟は、どんなに大漁だってこんなに舟が沈むことはないくらい重たかった。漕ぐのが大変で、九月にしては涼しい夜なのに、汗が噴き出した。父さんから、海が深いところまで行って捨てると言われたから、底が深くなるところのさらにその先はかなり沖まで漕ぎ出して、念のために潮の流れを見てから、錢の袋をひとつひとつ、どぶんどぶんと海に沈めた。錢袋を吸い込んだ水面に波の輪っかが一瞬広がって、けれどもすぐに元通りの静かな海に戻っていった。大きな西瓜ほどの重さの錢袋が四十四もあった。

全部の錢袋を投げ捨て終わってから、浜に向かつて漕ぎ出すまでの少しの間、船底に寝転んで息を整えた。ひと仕事を無事に終えて、舟は軽くなったけれど、

気分は逆に重たかった。夜が明けたら、大変なことになるだろう。これから先、打ち壊しをやった百姓たちや、銭を海に捨てた自分たちの身に何が起こるのか、見当がつかない。けれども、何も起こらないわけがないし、何か烈しいことが起こりそうな、ひりひりとした大風の気配が迫って来る」

次郎に当てられたスポットライトと櫓を漕ぐ音がゆっくりと消え去り、舞台が暗くなる。次郎は席に戻り、百姓二人がスタンドマイクの前に立つ。
舞台全体が柔らかい光に照らされる。

百姓2 「孫六、いるか」

百姓1 「おお、助六か」

百姓2 「これから行水か」

百姓1 「今日は、田甫の仕事も、畑の仕事も、もう終わりだ。何だか、富田の材木問屋が相当こつぴどくやられたらしいな」

百姓2 「今頃そんなことを言っているのは、お前くらいなものだぞ、孫六。昨日の夜から、中浦はこの話で持ち切りだ。百姓が縄で吊り下げた丸太を五本ばかり担いで行って、富田の店も屋敷も廃材の山に変えちまった。借金の証文は焼かれ、帳簿も焼かれ、銭袋が担ぎ出されたってことだ」

百姓1 「そんなことをして、お咎めはないのか、助六」

百姓2 「誰がやったか分からんだろう。打ち壊しに行った連中は、全員が頬かむりをして、ふんどし一丁だったらしい。仮に三十人が打ち壊しに行ったとして、中浦に百姓が何人いると思う。富田家の連中が探したって、侍が探したって、誰がやったかなんて分かりっこない。」

因みに、俺はやってないからな、孫六。

それにだ、今回の打ち壊しは天誅だ。打ち壊しに行った奴らはな、富田家の前にこう並んでな、『富田家は、千年の昔からある山を打ち壊し、洪水を引き起こして田畑や作物を打ち壊し、海を汚して魚や貝の住処を打ち壊した。富田家は、金儲けのために百姓の生活を打ち壊し、その上、高利貸しで貧乏人の生きる希望を打ち壊した。富田家の人の道に外れた悪行は、許されるものではない。われわれ百姓が、天に代わって成敗する』って宣言してから打ち壊しを始めたんだ。すかつとしたなあ。」

百姓1 「まるでお前が宣言したみたいだな、助六」

百姓2 「宣言したのは、ここ二月ほど中浦に逗留している浪人二人組の偉い方だったらしい。この浪人たちが打ち壊しを先導したっていうことだ。」

因みに、俺はあの場所で実際に宣言を聞いたわけじゃあないからな、孫六」

百姓1 「じゃあ、お咎めを受けるのはその浪人か」

百姓2 「聞いた話しでは、浪人たちも、お咎めを受けるのは俺たちだから、百姓たちにお咎めはないって言っていたらしい。この浪人たちが、こう刀を翳して、富田の家の人間を帳場に集めて、『蔵の鍵を出せ』って脅しつけてな、すると番頭が『分かりました』って素直に鍵を渡して、浪人が『鍵はここにある、蔵を開けて中の物を表にぶちまけろ』って言うと、百姓たちが『オー』って応えてな。その後も、

浪人たちが殺気を漲らせて富田家の奴らを見張りながら、いろいろと下知を出していたから、まあ、誰の目にも誰が首謀者かはよく分かっただろうな。

因みに、俺は見て来たような話しをしているだけで、あの場に居たわけじゃないからな、孫六」

百姓1 「領主の屋敷にいる不成者は来なかったのか。富田の店は、領主の店みたいなものだろう」

百姓2 「ああ、中浦村井家が雇入れた不成者の浪人たちか。あいつらは全員、昨日は午後から山に出かけて飯場でどんちゃん騒ぎだ。富田の店に来ることはできなかったし、百姓側についた浪人二人はそのことを知っていたらしい」

百姓1 「念がいつているな」

百姓2 「そうよ。それに、不成者たちも、中浦村井家には相当思うところがあるらしい」
百姓1 「ほんとうか」

百姓2 「俺たち百姓にしてみれば、この何年も、今年はぎりぎり飢え死にせずに生き延びられるかっていう思いで暮らしてきたわけさ。それなのに、あの不成者たちは、威張り腐って、強引に年貢を搾り取りに来るし、山で働く連中を散々こき使うし、工事の人足や足軽たちも酷い仕打ちを受けている。要は、奴らは極悪非道の不成者なわけなんだが、奴ら自身も、中浦村井家から極悪非道の扱いを受けているっていうことだ。あの不成者たち、打ち壊しがあることを知りながら、中浦を留守にしていたのかもしれない。いずれにしても、これから数日は、何が起るか分からないぞ。一揆が起きて、中浦は百姓の国になるっていう話もある。中浦村井家の出方によっては、百姓連中は戦をする覚悟だろう」

百姓1 「どんな極悪非道の扱いだ？」

百姓2 「何？」

百姓1 「だから、あの不成者たちは、どんな極悪非道な扱いを受けているんだって」

百姓2 「それは・・・俺にも分からない」

百姓1 「芋虫を喰わせるか」

百姓2 「するか、そんなこと」

百姓1 「唐辛子で目を洗うか」

百姓2 「それ、痛そうだな」

百姓1 「ちんちん、ちよん切るか」

百姓2 「お前な、どこからそういう発想になるんだ」

百姓1 「あー、すつきりしたあ」

百姓2 「お前、ほんとうに幸せな奴だな、孫六。お前の幸せな気分には水を差して悪いんだが、この話しには続きがある」

百姓1 「まだあるのか」

百姓2 「むしろここからが本題だ。この話しは、お前の気持ちを知っている俺から伝えねばならないと思って、大急ぎでここまで来たんだからな、孫六」

百姓1 「何だ」

百姓2 「富田の蔵にはたんまり銭が蓄えてあった。この銭は、ニワトリほどの大きさの丈夫な皮袋に入っていて、全部で四、五十はあったはずだ。蔵から出してそのまま放っておくわけにもいかないので、とりあえず百姓四人が持ち帰って預かるこ

とになったんだが、この四人が、自分の手元には置いておきたくなかったんだろ
う、どうしたと思う」

百姓 1 「知るか」

百姓 2 「大網の高崎の家に持って行ったらしい」

百姓 1 「サナちゃんのところか」

百姓 2 「そうだ。噂では、あそこの次郎が夜中に舟で漕ぎだして、どこかの島にでも隠
したんだらうっていうことだ」

百姓 1 「本当か？」

百姓 2 「本当かどうかは分からないが、ありそうな話しだろう。それで、この噂はおそ
らく富田家や中浦村井家の知るところとなった」

百姓 1 「サナちゃんに、何かあったのか」

百姓 2 「お前には言いづらいことだが、サナは、もう、口が利けないだけでなく、目も
見えなくなってしまうたらしい」

百姓 1 「・・・」

百姓 2 「誰かがサナを掠って、両目を焼いたっていうことだ」

百姓 1 「サナちゃん・・・」

百姓 2 「血だらけになって、一時ほど前に高崎の家に運び込まれたって聞いた」

百姓 1 「許せん。あの不成者たちが」

百姓 2 「いや、あの不成者たちじゃない。あいつらはまだ山の飯場にいるらしい」

百姓 1 「じゃあ、誰だ。俺が鉈で殴り殺してやる」

百姓 2 「お前の気持ちは分かる。サナちゃんとお前は、めおとになれる可能性は万に一
つもないし、向こうはお前の顔も名前も何にも知らない。それでも、お前はこの
五年間、一心一途にサナを想ってきたからな。お前の怒りは分かるし、俺だって、
怒っている。でもな、サナのことは今度こそ忘れろ。あの娘の家は大網だ。俺た
ちと違って金もある。口が利けなくても、目が見えなくても、何とか暮らしてい
けるだろう。起きてしまったことは、どうにもならない。お前にとってできるこ
とは、忘れることだけだ。俺は、お前のが心配で、こうして大急ぎですつ飛
んできたんだ。くれぐれも無茶なことはするなよ。これは、お前にとっても辛い
ことだが、お前が手出しをできることじゃあない。お前が何かを仕出かしても、
お前にとっても、サナにとっても、誰にとっても何一ついいことは起きない。落
ち着いて考えてみれば、分かることだ。孫六、分かったか」

百姓 1 「助六」

百姓 2 「何だ」

百姓 1 「・・・分かった。お前の言うことは分かる」

百姓 2 「そうか」

百姓 1 「だが、俺は悔しい。俺は悲しい。どうして、どうにもならないことばかりな
んだ。俺は悔しい。俺は悲しいんだ」

舞台の照明が消える。百姓二人は席に戻り、スタンドマイクの前に兵六が立つ。
兵六にゆっくりとスポットライトが当てられる。

「酷いことだ。高崎の家は、打ち壊しとは関係がない。主人の清兵衛は、打ち壊しを止めようとしていたくらいだ。少しの間だから家に持ち帰って床下にでも隠せと、忠治と二人であれだけ言ったのに、善人たちが錢袋を高崎の家に運び込んだのは想定外だし、高崎の家の娘に災難が降りかかったことも想定外だ。高崎の家は、今日は大変な厄日だ。その上、今日という日が終わらぬうちに、俺はこうやって、足音を殺して、夜道を歩く高崎清兵衛の後を付けている。月の光に照らされて、半町ばかり先を歩いていく後ろ姿がはっきり見える。仲治の下知とはいえ、俺はこの男を斬りたくはない。仲治と共に中浦にやって来てからこの二月、百姓たちから高崎清兵衛の話しを何度も聞いてきた。苦勞人で、人格者で、朗らかで、人望が厚い。今の状況で、あの百姓たちに物が言えるのは、高崎清兵衛くらいなものだろう。その清兵衛を、今晚、黒川久右衛門が呼び出して内密に話した、これは一揆を止めさせるための談合かもしれない、仲治がそう読むのも良く分かる。明日の一揆で中浦村井家を倒すまでは何としても邪魔立てを許してはならない。今晚、高崎清兵衛を斬れば、百姓たちが中浦村井家の仕業だと騒ぎ出し、明日の一揆に傾れこむことができる、そういう見立ても分かる。しかし、俺はこの男を斬りたくない。斬れという仲治の下知は、大浜村井家の上役から受けた下知ではない。大浜からは、一揆を起こして中浦村井家を倒させろという命を受けているだけだ。だったら、清兵衛に一揆の邪魔立てをするつもりがないのであれば、何も無駄に清兵衛を斬ることはない。清兵衛は、一揆のあとも、中浦の百姓を治めるために役に立つはずだ。頭の切れる男なら、今の中浦村井家が長く続かないことは分かるだろう。俺が腹を割って話して、一揆の邪魔立てをするつもりがないと分かったら、清兵衛を斬るのは止そう。仲治も分かってくれはらずだし、大浜からの下知に背くわけではない。一揆を無事に引き起こすことができれば、お咎めもないだろう。

（少し間を置いてから）あのととき、俺はそう思っていた。夜道を十町ほど歩いて、人気のない松林に入ったところで、足を速めて清兵衛に追いついた。『高崎清兵衛か』と声を掛けると、『そうだが』と言って清兵衛が振り向く。漁師らしい、がっしりとした体格で、上背は俺と然程変わりがなく、丸腰で俺と正面から向かい合っている。月明かりが松の木に遮られて表情は見えないが、声は落ち着いている。『黒川久右衛門との談合の帰りだな。一揆を止めようという企てか』と単刀直入に切り出すと、『さて、どなたかな。自分は高崎清兵衛だが』と静かに応える。俺は名乗るつもりがない。『訊いているのは俺だ。一揆を止めるつもりか』と問いを重ねると、『どなたか分からぬ人と、そのような話しをすることはできんだろう』と清兵衛が答える。『俺は一揆に加勢する。名乗ることはできぬ』と言うと、清兵衛は『そうであれば、お主と話しをすることはできん。失礼する』と立ち去ろうとするので『待て』と声を掛ける。清兵衛が言う。『自分を斬るか。斬るなら斬れ。いきなり斬り付けて来ないところを見ると、お主は、今日の打ち壊しを企んだ浪人の片割れか。大方、大浜村井家の家中だろう。百姓に戦をさせて、内浦村井家を滅ぼすつもりか。領主の争いで、苦しむのはいつも百姓』

（突然台詞が途切れたあと、少しの間がある）
最後まででは言わせなかった。俺の刀が左袈裟に清兵衛の肩と胸を切り開き、清

兵衛がゆっくりと膝を突いて前に倒れる。俯せに倒れた身体は、もう何も言わず、何も動かない。月明かりが照らす地面に清兵衛の黒い血が広がっていく。虫の音が戻ってくる。止めを刺さずとも、清兵衛はもう事切れている」

スポットライトがゆっくりと落とされ、舞台が暗くなる。

兵六が席に戻り、百姓二人がスタンドマイクの前に立った後で、舞台全体が柔かい光に照らされる。

「サトコウ、朗読が上手いね。なんかこう、迫力があるよね」

「学生時代に演劇サークルだったらしいよ。だから顧問を頼んだって川口が言ってた」

「守野はどうして演劇部を手伝ったんだっけ？」

「俺は、川口に頼まれたから。っていうか、川口がバンドでピアノを弾くっていう条件で、俺が演劇部の音響を手伝うことになったわけ」

「俺は、町田にフリースローで負けたんだよね。俺が勝ったら五千円もらって、負けたら演劇部で照明をやるっていう賭けでき、バスケットに入ったばかりだったから、町田が上手いって知らなくて。あいつが五本全部決めて、俺が三本。やられたよね。でも、町田は男子バスケの主将だったし、川口も女子水泳部の主将でしょ。よく演劇部もやったよね」

「あいつら幼馴染だから」

「町田と川口ね。高一の時から付き合ってたでしょ。今も続いてんのかな？」

「あと、瀬戸ね。あの三人は小学校からの幼馴染だから。瀬戸が中学の時に書いた劇があつてさ」

「『はなだいろ』じゃなくて？」

「あれも瀬戸が書いたけど、それじゃなくて、中学の文化祭用に書いた『ラーメン五郎』っていうんだけど」

「知らない」

「俺も中学から一緒だったから、文化祭で観ただけど、けっこう笑えたよ。小学校六年の同じクラスに、何故か一郎、二郎、三郎、四郎っていう仲間がいて、こいつらが自転車で二十キロ先の国道沿いにある『ラーメン五郎』までラーメンと餃子を食べに行くっていう、それだけの話しんだけど、四人を男子と女子が二人一役で入れ替わりながらやるんだよね。町田と入れ替わった女の子が、入れ替わった瞬間に『いきなり太った』とか言われてブチ切れたり、男子と入れ替わった川口が無理やり立ちしよんさせられたり、町田とハグさせられたりしてたな。瀬戸も、今よりも吃音が重かったんだけど、四郎の役で出ていて、どもる役なんだけど、入れ替わったはずの女子にどもりを教えに出てきたりして、まあ、けっこうドタバタなんだけど、役者二人の違いを知って役自体が成長する、みたいなエンディングだね」

「ふーん」

「『スタンド・バイ・ミー』がベースらしくて、後で台本を読ませてもらったから、いろいろ放り込んであったけど、漫才やコントっぽいところもあって、だから中

守 鮎
野 田

守 鮎
野 田

守 鮎
野 田

守 鮎
野 田

守 野

鮎
田

守 鮎
野 田

守 鮎
野 田

学生が恥じらいもなく全力でやり切れたんだろうね。笑えたし、良かったよ。あれで、町田がリバー・フェニックスみたいな気持ちになって、瀬戸に演劇をやらせるために高校で演劇部を立ち上げたんじゃないかな」

「何か良く分かんないけど、美しい友情と青春ですな」

鮎野 田 「サトコウがさっきの挨拶で言ってた百周年記念公演を勧められた話しだけど」
「うん」

守野 田 「あれ、金子さんっていう、森川市役所の文化振興係長だった人で、子供が女の子なんだけど、『ラーメン五郎』で一郎の役をやったんだよね。中学の頃はちよつと地味めな子だったけど、大浜高校に行って演劇部に入ってから性格が変わったらしくて、今、医学部で一緒なんだけど、サークルで演劇を続けていて、瀬戸のファンだったらしいから、今日は親も一緒に来てるかもね」

鮎野 田 「まじ。瀬戸くんチャンス到来かも。でも親が一緒だと引くか」

守野 田 「そろそろ村山さんの出番じゃない。香田と石田さんの百姓漫談は、香田に頼まれて何度か練習に付き合ってたけど、村山さんの朗読は聴いたことがないから、ちよつと楽しみなんだよね」

鮎野 田 「脚本読んだけどさ、サトコウって村山さんに気があるの」

守野 田 「それは、あるでしょ。演劇部の副顧問をお願いしたのはサトコウらしいよ。演劇には美術も大切だからとか言ってたらしいけど、気があるのは見え見えて川田が言ってた」

百姓二人は席に戻り、仲治がスタンドマイクの前に立つ。兵六は自分の席の場所ので舞台を向いて立つ。

仲治 「兵六、お前のお陰で、一揆は予定どおりに仕上がった。お前が高崎清兵衛を斬った翌朝には、百姓たちはみな、中浦家の家中が清兵衛を斬ったと口々に噂し合っている、中浦家許すまじという士気は上がるばかりだった。昼過ぎに号令をかけると、一時もしないうちに、槍や刀や鉞や銛を携えた百人を超える百姓が中浦家の屋敷の前に集まり、強訴の訴状を読み上げた時も、丸太で屋敷の門を打ち壊した時も、一揆の結束はそれは固かった。兵六、お前がここ二月、百姓たちと国造りについて昵懇に語り合い、固い信頼を勝ち得ていたお陰だ。中浦家の屋敷の門が崩れ、一揆が屋敷の中に傾れむと同時に、中浦家が雇った浪人たちがすぐさま寝返ったのも、兵六、お前のお陰だ。ここ二月、お前が浪人たちと酒を酌み交わし、中浦家の内情を探り、節目節目で銭を渡し、奴らに報酬と仕官の約束を信じさせたことが、奴らを寝返らせた。浪人どもが寝返れば、あとは中浦家は総崩れだ。足軽百姓はもともとが百姓だ。一揆が勝つとみれば当然一揆の側に付く。だから兵六、一揆が中浦家を倒したのは、お前の手柄だ。」

半年前、大浜家の老中から中浦で百姓一揆を起こすよう命を受けたとき、真っ先に思い浮かんだのが、兵六、お前のことだ。お前は誰からも好まれる珍しい人相をしている」

兵六 （その場で左右を見回し、自分の鼻を指差さす）
仲治 「それに剣の腕も立つ」

兵六 (その場で頭を搔く)

仲治 「おなごにモテず、やもめ暮らしが長いのが玉に傷だが」

兵六 (俯いて肩を落とす)

仲治 「妻子がいけないのは、危険な仕事にはむしろ幸いだ」

兵六 (目を見開いて仲治の方を見る)

仲治 「俺はお前のことをこの世に二人としない最高の相棒だと思っていたんだ」

兵六 (大きく頷く)

仲治 「だが、兵六、お前は何処に行っていたんだ。中浦家の家中が討ち死にし、当主の村井利重も斬り殺され、屋敷の裏に筵を敷いて骸が並べられた後、兵六、お前が手配した酒や肴が屋敷に運び込まれた。一揆の百姓の中には家に帰った者も多かったが、浪人どもや足軽百姓に交じって酒宴を楽しんだ者も多い。酒に目がないお前のことだ、ここ二月の苦労を共にした百姓たちと、ひと仕事を終えた宴席を楽しむに違いないと思っていた。それをお前は何処に行っていたんだ」

兵六 「俺は海に行っていた」

仲治 「屋敷の中を隈なく探し回った。百姓や浪人にも聞いてみた。けれどもお前の行方は杳として分からん。俺はいろいろ考えた。家に帰った百姓を訪ねに行ったのかと思ったが、主だった顔ぶれは屋敷にいる」

兵六 「月夜の浜辺を南に向かって歩いた」

仲治 「酒は十二分にあつたが、夜も更け、みな酔いが回って来て、家に帰る者は帰って行く。俺は、お前が大浜に帰ったんだと思つたぞ。さんざん考えたが、それ以外には考えがつかない。お前には年老いた父母がある。暫く大浜を離れると書き置いて来たとはいえ、理由も告げずに突然いなくなつて心配をかけた両親に達者な顔を見せたいと思うのは自然の情だ」

兵六 「漁師の集落に高崎清兵衛の家があつた」

仲治 「俺に何の断りなくも大浜に帰るのは理に適わぬが、何か急ぎの知らせを受けたのかもしれない、そう思つて、夜が更けてから俺も屋敷を去り、大浜に戻つたのだ」

兵六 「清兵衛の家は静まり返っていた」

仲治 「兵六、お前は優しい男だ。だから、お前には言えなかつた」

兵六 「明かりも消えていた」

仲治 「翌朝、夜明け前に大浜の家中や足軽が中浦家の屋敷を取り囲み、屋敷の中にいる浪人、足軽、百姓たちを撃ち殺し、撫で斬りにすることは、二月前から決まっていたことだ」

兵六 「俺は銭を持っていた」

仲治 「だが、お前に話すと、お前は悩んで、仕事が疎かになるだろう。だから黙っていた」

兵六 「清兵衛の双子の子供たちが一年は暮らしていけるだけの銭だ」

仲治 「今から思えば、お前に話す機会は何度もあつた」

兵六 「俺は銭を置いてこようと思つた」

仲治 「お前に話していれば、兵六、お前が屋敷に戻ることはなかつただろう」

兵六 「だが、俺はそうしなかつた」

仲治 「俺がお前に話しをしなかつたばかりに、お前は屋敷に戻つた」

兵 六

「俺は屋敷に戻った」

仲 治

「もう、みな寝静まっていたはずだ」

兵 六

「みな寝静まっていた」

仲 治

「残っていた酒を呑んだかもしれん」

兵 六

「そうだ、俺は残っていた酒をしこたま呑んだ」

仲 治

「兵六、お前は翌朝、納屋に居たそうだな。納屋で寝たのか。あるいは納屋に逃

げ込んだのか。いずれにしる鉄砲の音で目を覚まし、察しの良いお前のことだ、大浜の家中が攻めて来たとは知っただろう。流れ弾を避けて納屋に居たのは分かる。だが、納屋に踏み込んできた足軽二人をお前は斬った。その上、足軽を引き連れていた浅井甚九郎を一太刀で落命させた。お前が刀を捨てたのはその後だ。どうしてだ、兵六。どうして斬った。恨みか。足軽はともかく、浅井にはお前を斬るつもりなどなかったはずではないか。浅井や足軽を斬ったばかりに、お前は手柄を帳消しされたばかりか、百姓たちと一緒に牢に入れられている」

兵 六

（黙って上を見上げる）

仲 治

（少し間を置いてから）「兵六、俺は、酒好きで少々粗忽もののお前のことが好きだ。だから、今のお前を見るのは忍びない。誰が何と言おうが、お前は俺と一緒に大きな仕事を成し遂げた男だ。俺はお前の力になる。どこまでやれるか分からないが、俺はお前の力になる」

舞台の照明がゆっくりと落とされて暗くなる。

第二章

上手側に置かれたスタンドマイクの前に百姓二人が立つ。下手側に置かれたグランドピアノにサナが座り、弾き語り用のマイクが設置される。

トン、テン、カンと三拍子で木を打つ音が小さく聞こえてくる。
舞台全体がゆっくりと明るくなる。

百姓3 「梅雨が明けると日差しが強烈だな。外仕事の男衆はこう暑いとやりきれん」

百姓4 「外の方が風が吹いてて涼しいでしょ。そんなことより、日陰にぼさっと突っ立って無駄口叩いてないで、今日中に仕上げないと、明日は明日の仕事で忙しいんでしょ。サナも、もういつ赤ん坊が生まれてもおかしくないんだから、急いで小屋を建ててあげないと」

百姓3 「やっとお許しが出て、サナにも小屋を建ててやれるのは、俺も嬉しいよ。とはいえ、去年の暮れにこの河童の屁が固まったような土地に追いやられてから、休みなしに働き詰めだからな。何にもないじめじめした原っぱで、草を刈って、小屋を建てて、麦やら芋やら米やら育てて、その上、中浦の城づくりやら鎮川の工事にまで駆り出される始末だ。とんだ貧乏くじを引いたばかりに、体がいくつあっても足りないよ」

百姓4 「働けば、暮らしもきつと良くなるはず。麦も米も思った以上に育っているし、年貢も下がったし、山もこれからたくさん木を植えてだんだん緑になっていくっていうんだから、悪いことばかりじゃないでしょう」

百姓3 「いい目を見たのは、一揆を遠目に眺めていた意気地のない奴らだ」

百姓4 「そんなことは言わないの」

百姓3 「あいつらは、今も先祖代々の土地を耕して暮らしているし、まだ一年も経っていないのに一揆のことはすっかり忘れて、俺たちを追い出した土地に居座っている大浜の百姓たちと仲良くやっているそうじゃないか。一揆を戦った俺たちは、こんな河童の糞のような土地を渡されても、ここじゃあ小屋を建てても、稲を育てても、台風が来て洪水が起きれば、一発で全部押し流されちまう」

百姓4 「さっきは『河童の屁が固まったような土地』って言ってたわよ」

百姓3 「今は何て言ったんだ？」

百姓4 『『河童の糞のような土地』だって』

百姓3 「屁でも糞でも似たようなもんだ。屁が混じった糞、糞が混じった屁、どっちにしても願い下げだ」

鮎田 「あのさ」

守野 「なに」

鮎田 「お前の家って大きな病院だし、お前も医者になるんだよね」

守野 「まあね」

鮎田 「医者のお卵も患者の秘密は守るんだよな」

守野 「まあ、そうだね」

鮎田 「俺さ、ここ一週間、足が臭いんだよ。ちよっと診てくれない」(といって鮎田は

バスケットシューズを脱ぐ)

濁ったおならの音

守野 (大いに驚いた様子で)「臭っさ」

百姓4 (大きな声で)「臭っさいわね」

(百姓の声に、鮎田と守野はビクリと驚く)

百姓3 「わりいわりい、屁混じりの糞、じゃない、糞混じりの屁が出た」

百姓4 「洗ってらっしゃいよ、ほんとにもう」

百姓3 (鼻歌を歌いながら上手に捌ける)

守野 「お前の足、本格的に臭いな。ちゃんと洗ってんの？」

鮎田 「洗ってるよ。一日三回、ボディソープで丁寧に洗ってるし、ここに来る直前に
もちゃんと洗ってきたよ」(と言いながら靴下を脱ぐ)

百姓4 「さてはあいつ、サボリに行ったな。まあ、水浴びでもして涼みたくなるのも分かるけれどね。あたしも朝から休みなしだから、ひと区切りついたら、少し休もうかしらね」

守野 「両足とも見たところはキレイだし、これ以上見ても分かんないからさ、取り敢えずその靴を履けよ。この部屋狭いし、閉め切ってるからさ」

百姓4 「ずっと狭い小屋にいると息が詰まるわ。ちよつと、サナのところにでも行ってみましょうか。あの子も、生まれて来る子供の名前を『鬼彦』にするって、いつ覚えたのか文字が書けるのも驚きだけど、『鬼彦』っていう名付けのセンスはもつと驚きだわ。ちよつと考え直させないと」(と言ってから下手に捌ける)

トン、テン、カン、木を打つ音にあわせてサナがピアノのキーを叩き、この音階を崩しながら即興でメロディーを引き始める。トン、テン、カンの木の音がゆっくりと消え去り、サナのピアノの演奏が始まる。

瀬戸 あの時もこんなピアノだった。夕方、高校の音楽室に四人で集まって、演劇部の部活なんだけど、何をするか何も決まっていなくて、手持無沙汰な感じだった。何でもいいから課題を決めるよと町田に言われて、その日の課題を考えて来るはずだった内浦が、ちよつと考えるから黒板に短歌を書いた。

ゆめうつつ

ゆきつもどりつ

めざめるな

はなだにそまる

あかつきのそら

ずっと前に少女漫画で見たとか言ってたけれど、内浦が詠んだ短歌のような気がした。確か高校生の男女が入れ替わる漫画だったと言うから、あみだ籤をして、町田と川口が入れ替わり、内浦と自分が入れ替わることにして、モノローグを演

じてみることになった。最初に内浦が自分になって、頑張っても台本が書けないけれど、他の三人には頼めないから自分で書くしかない、といった半分愚痴のような短い独り言を演じた。次に、町田が川口になって、町田の顔を見るたびに、小学校四年生の時に町田が川口の家で騒いで雛人形の首を折ったことを思い出すけれど、もういい加減許そうと思う、といった告白をした。その後で、川口がピアノを弾き始めて、最初は町田の真似をするようなギクシャクした辿々しい演奏だったけれど、台湾映画の素敵な曲で、すぐに滑らかで饒舌になって、音数が増えて、テンポが揺れて、そのうちにメロディが崩されて、最後は元の旋律に戻って静かに終わっていった。「はなだいろ」の公演のときも、あのピアノのアイディアをそのまま使わせてもらったけれど、公演のときは、もっと集中して気合が入った感じの演奏だった。今日の川口のピアノは、曲は違うけれど、あの音楽室で聴いたピアノに似ている。ちょっとコミカルで、生き生きした音だけれど、心は遠くを眺めているようで、少し寂しい。

あの日、音楽室の窓から夕焼け雲が見えていた。川口の演奏が終わって、一瞬静かになったとき、「町田と川口って、恋人同士っていうよりも、兄弟だよ」と内浦が言った。川口が黙って立ち上がって、ピアノの蓋をカタンと小さな音を立てて閉めた。その後のことは憶えていない。憶えていないけれど、あの日が出来事があったから、「はなだいろ」の台本が形になって、自分たちのことが写し込まれていったし、四人で「はなだいろ」を作ったあの何か月かの間、四人とも、あの日、音楽室に立ち戻ってみることが何度もあったと思う。

自分は、今でも時々あの日、音楽室のことを思い出す。そして考える。内浦の言葉は、内浦の気持ちだったのか、それとも自分の気持ちを代弁したつもりだったのか、あるいは、その両方だったのか。

サナ

(ピアノの演奏のテンポが緩くなり、弾き語りが始まる)

「ワレの手足が腹を蹴り

ワレの心を震えさす

ワレの命が半分で

もう半分は鬼の聲

鬼彦 生まれて来るのなら

鬼彦 ワレを愛します

鬼彦 その名を愛しなさい

鬼彦 すべてを愛しなさい

(歌が終わった後もサナはピアノを弾き続ける)

ピアノ演奏の途中から、下手舞台袖の百姓4がギター演奏で加わり、舞台に出てサナの傍で暫く演奏してから下手に捌け、ピアノとギターの演奏が終わる。

百姓4

(下手から出てスタンドマイクの前に立つ)「まだあの人は帰っていないのかい。いつまで油を売ってるんだらうね。日が長いとはいえ、今日中に何とかしないとならないっていうのにな」

百姓5 (上手から出てスタンドマイクの前に立つ)「孫六はいるかい」

百姓4 「どこかへ出かけて行って、もう小一時間になるから、そろそろ帰ってくるはずだけれどね」

百姓5 「お前さんも大変だな。これ、サナの小屋だろ」

百姓4 「やっと小屋を建てるお許しが出てね。あの子は不自由な身体で身重だし、身寄りもないから、皆で小屋を建ててやらないとね」

百姓5 「本来なら、サナの小屋を建てるのは次郎の仕事だがな。次郎と一緒に牢屋に入っていた善人たちは、昨日、下浦に帰って来た。次郎も強情を張らずに帰って来られれば良かったんだが」

百姓4 「聞き捨てならないね。帰って来た奴らは、次郎に罪をおつかぶせて帰って来たんだろう。富田家の銭は高崎の家に預けただけで、後のことは知らないって、口裏合わせしたらしいじゃないか。あいつらも一緒になって銭は捨てるって決めたんだろ。それを、次郎に全部おつかぶせて、自分たちだけ帰ってくるっていうのは、どうなんだろうね」

百姓5 「まあ、そういう話でもあるが、銭はほんとに捨てたと思うか。次郎がどこかに隠したのかもしれない」

百姓4 「お前さん、次郎を疑うのかい」

百姓5 「次郎が隠したとしたら、サナは隠し場所を知っているかもしれないな。まあ、サナは目が見えんから、今更銭探しはできんだろうが」

百姓4 「次郎は銭を捨てたんだよ。お前さんも、清兵衛さんが銭を嫌っていたことは知っているだろう。『銭なんて、あんな腐りもしないし黴も生えない、貯め込むためにできたようなものは、この世にない方が随分ましだ』って、ずっと言っていたじゃないか。それに打ち壊して物を盗るのはご法度だろ」

百姓5 「そうは言っても、一生気楽に暮らしていけるだけの銭だぞ。隠せるものなら隠しておこうって考えるのが人情ってもんじゃないか。次郎も、隠した銭を残らず御上に返して、土下座をして詫びを入れれば、こんなことにはならず済んだかもしれないのに、銭は捨てたと言い張り、詫びも入れないっていうことになれば、磔になるより仕方がなからう」

百姓4 「次郎は磔になるのかい」

百姓5 「俺もまた聞きだが、そういう話した。次郎と、あの兵六っていう浪人が、近いうちに磔になるらしい。しかも、昨日帰って来た善人たちが、次郎と兵六を磔にする役目を命じられたっていう話した。酷いことだよ」

舞台の照明がゆっくりと暗くなるのと同時に、ピアノに座ったサナにゆっくりとスポットライトが当てられる。

サナ (しばらくの間静かにピアノを弾いてから、弾き語り始める)

「雨が降る日も晴れた日も

来る日も来る日も好きだった

ワレはワレの横顔が

来る日も来る日も好きだった

そんなワレの横顔が
日に日に薄れて遠くなる
ワレは十九で死ぬらしい
ワレは十九で母になる
生まれかわりの母になる
双子は崇ると言われても
ワレといられて幸せで
来る日も来る日も幸せで
ワレといられてありがとう
ほんとにほんとにありがとう」
(弾き語りが終わった後も、ピアノの演奏を続ける)

サナに当てられたスポットライトが徐々に暗くなり、舞台が完全に暗くなった
後で、サナのピアノの演奏が終わる。

第三章

鮎田 「川口、いいね」

守野 「バンドで弾いてるピアノもセンスが良くて、人気があるんだよね。歌は、あんまり歌いたがらないけど、声がいいよね」

鮎田 「曲は、守野も一緒に作ったんでしょ」

守野 「まあ、そういえばそうだけど、川口がアドリブでやってるところも多いし、基本川口が作った曲だよ」

鮎田 「川口ってさ、町田と続いてんの？」

守野 「気になる？」

鮎田 「いや。でも、町田はリハにも来なかったみたいだし、この後のサトコウとの掛け合いも、ぶっつけ本番でしょ。どうしたのかなって」

守野 「町田と川口は、大学入る時に別れたらしいよ」

鮎田 「ふうん。何かもつたいたい気もするけどね。町田は東大でバリバリやってるんでしょ。早稲田に行ったバスケ部の奴から、町田は塾講師で稼ぎまくりながらバスケのサークルでキャプテンやって、成績も良いらしいし、コンサルとかIT系とかキラキラなところに行行ってガンガン稼ぎそうな感じだって聞いたよ」

守野 「川口は地元で高校の音楽の先生をやりたかって昔からずっと言ってるからね」

鮎田 「人生設計の違いですか」

守野 「いろいろあったみたいだし」

鮎田 「いろいろね」

守野 「フナダジンの足の臭いみたいにさ、身近にいても、靴を脱がない限り分からない悩みってあるんじゃない」

鮎田 「お前ね、誰にも言うなよ」

照明が落とされた舞台にスタンドマイクが二本、上手側と下手側に離れて設置されている。上手側のスタンドマイクの前に次郎が立ち、下手側のスタンドマイクの前には誰も立っていない。

次郎にスポットライトがゆっくりと当てられる。

次郎

「この屋根もない大きな鳥籠のような牢屋の格子越しに満月が見える。もう子の刻になる頃だろう。目が冴えて今夜は眠れそうもない。明日の朝には磔にされるのだから、無理もない。兵六も同じだろう。牢の反対側で目を閉じて静かに座っている。昨日までこの牢にいた善人たちは下浦に帰っていった。生きて家に帰れるっていうのは何よりだ。善人たちも、半年以上この鎮川の工事で骨と皮になるまで働かされて、ぼろぼろになってしまったが、直に回復するだろう。そうしたら、下浦のために働いてくれる。サナの力にもなってくれるはずだ。」

サナに会いたかった。口も利けず、目も見えず、下浦に追いやられて不自由な暮らしをしているだろう。誰も身内がないから、寄合所の隅で寝起きをしていると聞いた。皆が不幸なサナを気にかけて助けてくれるはずだが、時が経てば、人の情けも薄れていくだろう。ワレがサナを助けなければならぬのに、申し訳

ないことをした。明日、磔になれば、もう二度とサナに会うことはできない。

ワレはどうすれば良かったのか、何が正しかったのか、何度も考えた。富田家の銭を捨てずに、どこかの島に隠していたら、銭を返して詫状を入れていたら、善八たちと同じように放免になっていたかもしれない。ワレはどうして銭を海に捨てた。父さんが捨てるように言ったからだ。だがあの時、ワレは銭を捨てるのはおかしいと思っていた。銭はいろいろ役に立つし、捨てることはない、そう思っていた。ワレは、銭を隠そうと思えば、亀島でも平島でもどこかの島に隠せばいい。侍たちがそう考えるのも尤もだ。あのとき、ワレが自分で正しいと思っただけで、助けることができたかもしれない。

けれども、ワレは銭を海に捨ててしまった。侍たちに銭はどこだと問い詰められて、海に捨てたと言っても信じてもらえず、殴られ、蹴られ、鞭で打たれた。あの時、ワレにできることは、善八たちの罪を軽くすることだけだった。だからワレは、銭を持って来た百姓は父さんに銭を預けただけで、銭を捨てると決めたのは父さんだと言った。善八たちもそう言ったらいい。だから、最後は侍たちも諦めて、善八たちには詫状を入れさせて、放免にしたのだろう。ワレは嘘をついたが、あれは正しい嘘だった。

一揆には犠牲が付き物だ。百姓が何人も殺された。父さんは斬られ、サナは目を焼かれた。一揆に参加した百姓は、先祖代々の土地を奪われて下浦に追いやられた。中浦村井家の侍や浪人も殺されたし、富田家は潰された。たくさんの方が犠牲になって、世の中が変わる。ワレが磔になるのも、不運なことかもしれないが、これも運命だ。後悔はない」

次郎に当てられていたスポットライトがゆっくりと消え、舞台が暗くなってから次郎は上手に捌ける。

川口

優、あなたは正しさを求めるけれど、それはそんなに大事なことなの？ 優、あなたは優子のお見舞いに行かなかった。あなたが優子の病室に行ったら、優子はとても動揺したかもしれない。だからお見舞いに行かなかったことは、あなたに言わせれば「正しい」ことなんでしょう。でも、知らないでいることは正しいことなの？ 一年前、大学二年の夏休みが終わる頃に、わたしは志郎と一緒に優子のお見舞いに行ったわ。志郎が車を運転して、山の中の静かで何も無い場所にある精神病院に。優子は四月から大学に来なくなっていたし、連絡もつかなくて、どんな状況か心配だった。優子の家でお母さんに会って、病院の場所を聞いてお見舞いに行ったの。三階建ての古いコンクリートの建物で、優子の病室は二階だった。病室に入ると、窓に向かって左右にベッドが四つずつあって、空のベッドが五つ、焦点の合わない目をしたお年寄りが黙って横になっているベッドがあった。優子のベッドは左奥の窓側で、窓には金属の格子がついていた。優、あなたは知らないでしょう、一年前の優子がどんな様子だったか。目は落ち窪んで、頬が痩けて、顔にも首にも皺が目立って、腕は干乾びた枯れ枝のようで触ると折れそうだった。そんな姿で、優子は「ごめんなさい、心配かけて」って言うの。

あんなにキレイで可愛いかった優子が、いつ心臓が止まってもおかしくないような姿でそう言うの。摂食障害だけど、治らなくていいって。優、わたしがどれだけ悲しかったか、あなたは知らないでしょう。あれから一年経って、優子が今どうしているのか、生きて元気に暮らしているのか、心配だけれど分からない。優子はもうあの病院にはいないの。優子の両親は離婚して、ふたりとも森川を離れてしまつて、優子の弟も進学を諦めて行方知れずだつて聞いたわ。だから、優子とは連絡が取れないの。今日の公演も、優子の目に触れるようにつて、いろんな方法でできる限りの告知をしたけれど、優子は来なかった。優、わたしはあなたを責めているわけじゃないの。でも、あなたはわたしの気持ちも、志郎の気持ちも、優子の気持ちも、何も分かっていないでしょう。

下手から舞台に出て、下手側のスタンドマイクの前に立った兵六に、スポットライトがゆつくりと当てられる。

兵六

「この屋根もない大きな鳥籠のような牢屋の格子越しに満月が見える。もう子の刻になる頃だろう。目が冴えて今夜は眠れそうもない。次郎も同じだろう。しばらく前から牢の反対側に寝転んで月を見上げている。あと一時もすれば、隣国の昌徳寺の使いの者が迎えに来るだろう。仲治の計らいで、自分の脱走は大浜村井家の上の方まで内々に了解が得られているという。今回の一揆での自分の働きを分かってきている者も多い。磔はあまりに酷と思ひ、脱走を見逃してくれるのだろう。跡取り息子を殺された浅井家は自分を許しはしないが、逃げた先を探し出すことは至難の業だ。仮に探し出せたとしても、昌徳寺は隣国の領主も手出しができない寺と聞いている。何もすることはできないだろう。

だが、三日前に脱走の話しを耳打ちされてから、自分はずっと考えている。

自分はこの次郎の父親を斬った。高崎清兵衛は一廉の人物だった。その清兵衛を、大浜村井家のためとはいえ、何の罪もないのに斬ったのはこの自分だ。その上自分は、自分の恨みを果たすために浅井甚九郎を斬り、そのために足軽二人も斬り殺した。どこからどう見ても自分は罪人だ。それに引き替えこの次郎は何をした。錢袋を海に捨てただけだ。打ち壊しや一揆には加わってすらいらない。自分と比べると、次郎よりも自分の方が遥かに罪が重い。

それにこの次郎は、自分よりもひとりは若く、将来のある男だ。漁師仲間の評判も良いようだし、災難をもたらした善人たちのために罪を引き受ける潔さもある。鎮川の工事でも、身体を傷めた年上の百姓に代わって辛い仕事を何度も引き受けていた。最初の牢屋に入れられた頃、自分とは口を利かなかつた善人たちと談判して、自分も一緒に牢屋暮らしができるように計らってくれた。この男は、数年もすれば清兵衛のような立派な男になるだろう。そんな次郎を牢屋に残して、自分だけがこそと脱走する。それがお天道様に恥じない生き方か。そうやって自分一人が脱走して生き延びたとして、その先、自分は胸を張って生きていくのか。

勿論、自分は自分の命が惜しい。父母のことも心配だ。自分の脱走に骨を折ってくれた仲治や家中の縁者に心から感謝している。あの人たちに二度と会うこと

ができず、礼を言うことができなかつたとしても、せめて脱走した自分が何処かで達者に暮らしていて、何かのお役に立っていることを伝えたい。
やはり、自分はひとり脱走するべきなのか。自分はどうすればいい」

兵六に当てられていたスポットライトがゆっくりと消える。

川口

優、高校を卒業して、あなたは東大に、私は大浜大に進学することになって、お互い別々の道を歩もうと話し合ったあと、わたしはどうしようもなく落ち込んでいたの。大学に入ってからもバンドは続けていたけれど、水泳は止めてしまっただし、勉強にも遊びにも、何にも身が入らなかった。大学に入って最初の夏休みに、あなたが森川に帰省しなかった時、やっぱり寂しかったんだと思う。わたしが鬱っぽいのを気遣った優子が、夏休みが終わる頃に、東京に遊びに行くからあなたに会ってくるって言ってくれたの。その話しを聞いた時、優子はあなたに会って、たまには森川に里帰りしようって話してくれるんだと思った。実際、優子はそうするつもりだったはずだし、あなたに会って、里帰りを勧めたと思う。けれども、東京から帰って来てから、優子はわたしや志郎を避けるようになって、大学で会ってもちよっと挨拶する程度で、冬頃には随分痩せているみたいだった。

東京で優子とあなたの間に何があったか、優子は何も言わなかったけれど、だいたい想像はつくの。あなたは気付いていなかったと思うけれど、優子は高校一年の時からあなたのことがずっと好きだったし、そういう気持ちで来た優子を、あなたは拒まないと思うから。優、わたしはあなたを責めてはいないの。優子に起きてしまったことは、誰にも、優子にも原因は分からない。何かの拍子に、優子が抱えていた暗くて深い迷路のような場所が口を開けて、優子を引き摺り込んでしまったけれど、そのことで誰を責めることもできないと思っっているの。でも、あなたは、優子がどれだけ深くあなたのことを好きだったか、分かっていると思う。あなたは、志郎が小学生の頃から私のことをずっと好きでいることも知らないでしょう。優、あなたは優秀な人だし、素敵なところもたくさんある。でも、あなたには見えていない場所、見ようとしていない場所、見てもすぐに忘れてしまっただけにも留めていない場所があるの。

明かりを落とした舞台の上で、次郎が上手側のスタンドマイクの前に立ち、兵六が下手側のスタンドマイクの前に立つ。

二人にスポットライトがゆっくりと当てられる。

「月がきれいだな」

「・・・」

「次郎、お前背丈はいくつだ」

「ワレの背丈か？」

「ああ」

「五尺四寸だ」

「随分痩せたな」

兵六 次郎 兵六 次郎 兵六 次郎 兵六

次郎 「まあな」

兵六 「あれだけ働かされて、碌に飯も食えなければ、お互い痩せ細るな」

次郎 「・・・」

兵六 「もう骨と皮みたいなんだ。でも、こうして鎮川も出来上がって、あとは水を流すだけだ。これができれば、材木の行き来も楽になるし、このあたりの便も良くなる。森川の洪水も減るだろうし、後の世の人たちは、俺たちがいい仕事をしてくれたって思うんじゃないか」

次郎 「兵六」

兵六 「なんだ」

次郎 「鎮川の工事で大将のように下知を出していた男がいるだろう。何枚もある凶面を広げながら」

兵六 「ああ」

次郎 「あれは誰だ」

兵六 「大浜村井家の家中で、植田与三郎という男だ。まだ若いが、京や大阪で測量術や治水工事を学んだらしい。手際の良い差配だったな。あの男がいなかったら、こうも早くは工事を終えられなかっただろう」

次郎 「大したものだった。いいものを見させてもらった」

兵六 「気になっていたのか」

次郎 「ああ。だが、善人たちの前では訊きずらかった。それから兵六」

兵六 「なんだ」

次郎 「一揆があつた日の夜、浜を歩いてワレの家の前まで来ただろう」

兵六 「・・・」

次郎 「どうして来た」

兵六 「・・・浜を歩いていただけだ」

次郎 「そうか」

兵六 「次郎」

次郎 「なんだ」

兵六 「言い訳がましいから、今まで黙っていたが、自分は、一揆の翌朝に大浜の軍勢が中浦の屋敷に攻めて来るとは知らなかった。屋敷にいた浪人や百姓が皆殺しにされることも、知らされていなかった。殺されたあの者たちは、自分が一揆に誘い込んだ者たちだ。何度も酒を酌み交わした仲間だ。今でも、一人一人の顔をはつきりと思い出せる。自分は、知らなかったとはいえ、あの者たちを裏切る事になってしまった。自分は、あの者たちに申し訳ないと思っている。善人たちが自分を許さないことも良く分かる。」

次郎 「知らなかったのかもしれないが、裏切ったことに変わりはない。ワレはお前たちがやったことを忘れはしないし、許してもいない」

兵六 「自分は忘れてくれとも許してくれとも頼まない。自分も、自分がしてしまったことを、忘れていないし、許してもいない」

次郎 「そうか」

兵六 「次郎、聞いてくれ。一揆の翌朝、自分は、自分の恨みを晴らすために人を斬り殺した。浅井甚九郎という男だ。浅井が連れていた足軽二人も斬り殺した。あの

朝、自分は鉄砲を撃つ音で目が覚めた。中浦の家中は鉄砲を持っていないから、撃っているのは大浜の鉄砲隊だとすぐに分かったし、屋敷にいる浪人や百姓たちが撃たれていると察しもついた。しかし、何もしてやることもできず、自分は怖れと怒りを堪えて納屋でじっとしていた。鉄砲の音が止んで少ししてから、足軽が二人やって来て、納屋の戸を大きく開けた。戸口の先に、浅井甚九郎が刀を抜いて立っているのが見えた。その後のことは、一瞬だった。自分は向かって来た足軽二人を斬り倒し、浅井甚九郎を一太刀交えた後で斬り殺していた」

「・・・」

兵次郎

「浅井甚九郎という男は、自分の妹を嫁に取ったが、二年経っても子ができな」と言つて離縁し、付き返してきた男だ。その後すぐに、足軽頭の娘を嫁に迎えたが、その嫁にも子ができず、結局養子を取った。妹は、浅井の家で相当苛められたのだろう、勝気で美しい娘だったのに、実家に戻った時は別人のようになっていた。その後、他家に嫁いで娘を一人生んだが、気を病んで、氾濫した森川に身投げしてしまった。浅井甚九郎は、妹を離縁する前後も、妹が死んだ後も、妹について良からぬ話しを撒き散らし、父母がどれだけ心を痛めたか知れない」

「・・・」

兵次郎

「次郎、聞いているか？」
「ああ、聞いている」

兵次郎

「自分がこうして牢に繋がれているのは、自分の怒りに任せて三人も人を殺めたからだ。浅井の家も、跡取りを殺されて黙ってはおられまい。自分は罰を受けて殺されても仕方のない人間だと思っている。だが、次郎、お前は違う。お前は誰も殺していない。銭を海に捨てただけだ。それでどうして殺されなければならぬ。お前には妹がいる。妹のためにも、生き延びようと思わんか」

「何を言っている、兵六」

兵次郎

「次郎、あと一時もすると、隣国の昌徳寺という寺から自分を迎えに使いが来る。このことは、大浜の村井家とも話しがついているそうだ。お前、自分の代わりに逃げる」

「逃げてどうするんだ」

兵次郎

「しばらくは昌徳寺で暮らせ。昌徳寺は領主も手出しができない公界の寺だ。お前が捕まることはない。その後のことは、自ずと道が開けるだろう」

「お前は どうするんだ」

兵次郎

「自分は、明日磔にされる」
「一緒に逃げないのか」

兵次郎

「昌徳寺は末次兵六を迎えに来る。逃げられるのは一人だけだ。次郎、お前は兵六として逃げて、兵六として昌徳寺で暮らせ。自分はここで次郎として磔にされる。幸いお前と自分は背丈が変わらないし、お互い骨と皮になっている。顔を汚せば、遠目に見ても見分けがつかないだろう。明日、磔を行いにやって来る連中にとつては、次郎を磔にしないと具合が悪い。牢屋に自分しかいないのなら、自分を次郎だということにして磔にした方が好都合だ」

「それはできん」

兵次郎

「どうしてだ」

次郎 「お前の情けは受けない。兵六、お前はワレらにとって裏切者だ。ワレはお前を許していない。お前の情けを受けて生き延びることはできない」

兵六 「次郎、自分はお前に情けなど掛けてはおらん」

次郎 「自分の代わりに生き延びろというのだろう。そんな情けは受けられん」

兵六 「次郎、自分はお前に兵六として立派に生きてもらいたいのだ。自分は逃げたところで、父母や世話になった縁者に会って礼を言うこともできないだろう。兵六が立派に生きているという風の便りが届けられたら、これに勝る恩返しはない。けれども、自分には新しい場所でこの先の一生を切り開いていく自信がない。自分は罪人だ。お前をここに残して逃げおおせたとしても、自分の罪を悔やんで生きていくのが関の山だろう。だが次郎、お前は違う。お前は俺が見込んだ男だ。お前には月並みでない傑れたところがたくさんある。まだ年も若く、先も長い。新天地で活躍してくれるだろう。お前が兵六として生きてくれた方が、余程世間に恩返しができるというものだ。分かるか」

次郎 「分からん。第一、ワレは兵六として生きたくなどない」

兵六 「頭を冷やして考えろ。お前はこの場に残っても、明日の朝には磔にされる。そこを見ろ。皆で掘った鎮川の川底に穴がある。明日の朝にはそこに木組みが立ち、お前は大の字に括り付けられて、槍で腹を何度も突き刺されることになるぞ。あとはそのまま川底に埋められて、墓にも入れない。それで良いのか。ここから逃れて昌徳寺に行けば、学問をして諸国を回り、見聞を広められるかもしれない。昌徳寺には市も立つというから、商いもできるだろう。次郎、お前にはそうやって立派に生きてもらいたいのだ」

次郎 「ワレにはそんなことはできない」

兵六 「どうしてだ」

次郎 「裏切者から恩義を受けて、裏切者の名を借りて生きることが、正しいこととは思えない」

兵六 「確かに自分は裏切者だ。裏切者に恩義を感じたくない気持ちは分かる。ならば次郎、お前はこの裏切者を許せ。許してくれ。この兵六を許して、お前は自由になっしてくれ。そして、お前自身のためにここを出ろ。ここを出て生き延びろ」

次郎と兵六に当てられていたスポットライトが消え、次郎は上手に、兵六は下手に捌ける。百姓6と百姓7が上手側のスタンドマイクの前に立ち、仲治が下手側のスタンドマイクの前に立つ。スポットライトが消えてしばらくしてから、舞台全体が薄暗く照らされる。

百姓7 「善人たちが夜明け前に出るといいうから後をついて来たが、こんなところで足止めされると、何が起きているのかよく分からないな」

百姓6 「遠い上に暗いな」

百姓7 「あの、川の底で人が動き回っているあたりで、磔にされるのだろうか」

百姓6 「そうだろう」

百姓7 「結局、下浦から来たのは、俺たちだけか」

百姓6 「こんな時刻とは誰も思っていなかったからな。今から呼びに行こうにも、片道

半里はあるから無理だろう」

百姓7 「見送りが少ないと寂しいな」

百姓6 「あちち側に二、三人いるな。しばらく先にいる侍も、お役目ではなさそうだ。それに、善八たちも見送ってくれるだろう。酷な役回りだが」

仲 治

「大分明るくなってきた。木組みが一つということとは、やはり兵六は無事に逃げられたということか。あいつは気が優しいから、清兵衛を殺した負い目を感じて、自分の代わりに次郎を逃げさせたりはしないかと心配もしたが、見知った見回りの家中から逃げたのは兵六だと聞いて安心した。あの男のことだ、昌徳寺でも何かしら活路を見出して生きていくだろう。これで末次家の老いた父母にも少しは申し訳が立つ。ひとりで磔にされる次郎には済まないが、これも致し方のないこと。潔く諦めて成仏してもらおうしかない」

百姓7 「柱を立てられたぞ。一本だけか」

百姓6 「兵六も磔にされると聞いたがな」

百姓7 「あそこに縛り付けられているのが次郎か」

百姓6 「遠くて分からないが、そうだろう」

百姓7 「周りで槍を持っているのが善八たちか」

百姓6 「そのはずだ」

百姓7 「恐ろしいことよ」

百姓6 「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

百姓たち 「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

仲 治

「木組みの前に立っている四人が、善八たちだろう。あの者たちが申し付けどおりに富田家の錢袋を手元に取り置いていたら、こうはならなかったはずだ。錢袋のことは予期せぬ成り行きだったとはいえ、こうして自らが招いてしまった結果を、あの者たちも一生悔いることになるだろう。」

家中の侍が何か下知を出しているのが聞こえる。木組みの右側に進み出たのが善八だろう。あの者は槍が上手い。次郎が苦しませぬよう、ひと槍で急所を突くだろう。善八が一礼をしてから前に出て、足場を確かにしてから槍を構える。良い構えだ。腰が下がり、脇が緩く締まり、足元から精気を汲み上げる。そして鋭い気合の声と共に滑らかに繰り出された槍が次郎の左腹を刺し、右肩に向けて心の臓を突き抜けていく」

赤ん坊が生まれる泣き声が微かに響き渡り、百姓たちは念仏を止める。

百姓たち (驚いた声で) 「聞こえたか」

舞台の照明がすっと落とされる。

第四章

舞台の中央に椅子とスタンドマイクが置かれ、久右衛門が椅子に座っている。椅子には一本の杖が立てかけてある。

久右衛門にゆっくりとスポットライトが当てられる。

久右衛門

「高崎清兵衛を呼びにやって話しをしたのが、昨日のことだったか、一年前のことだったか、百年前のことだったか、もう分からない。今、清兵衛を目の前にして話しているような気もするし、あるいはこれから何十年も経ってから起きることのようにも思える。高崎清兵衛が、富田家の錢袋をどこかの島に隠したという噂が流れている。そして、娘が拐われて目を焼かれた。痛ましいことだ。高崎清兵衛は頼もしい男だった。歳は四十を過ぎた頃で、がっしりとした逞しい体を日焼けした肌と麻の衣が包んでいる。不運や不幸に襲われても冷静さを失わず、自分や百姓たちが置かれた状況をちゃんと分かっていた。あの男が生きていたら、一揆はなかったかもしれない。

『清兵衛、そもそもの発端は、大浜村井家と中浦村井家の兄弟喧嘩だ。大阪の材木の商いの利権や、堺から仕入れた鉄砲を握って離さない大浜の兄に痺れを切らした中浦の弟が、手段を選ばずに貯えを作り、密かに鉄砲を買おうとした。気づいた兄は、弟から貯えを巻き上げようとした。これが事の発端だ。だから、錢を大浜村井家に渡せば、この騒ぎは収まるところに収まる。あとは、中浦村井家にお咎めがあるだけだ』、そう言った自分に、清兵衛は『錢は海に捨てた』と言い放った。『あんなもの、無くても百姓は暮らしていける。持っていれば争いの元になる。侍に渡しても、戦や城普請の余計な仕事が増えるだけだ。錢は、捨てられるものなら、捨ててしまった方がいい』、というのが清兵衛、お前の言い分だ。

清兵衛、お前は知らぬことだが、一揆の後、大浜村井家は三百年近く中浦を治め、我が黒川家も、代々にわたり山を守り、材木の商いを続けて財を成した。三百年間だ。その後で、世の中が変わった。いや、これから世の中が変わるのか。黒川家は山を禿山にして錢を作り、中浦を出て東国の大きな都に移り住んで、そうして、錢に錢を生ませる仕事を生業にする。錢を海に捨てたお前には分からぬだろうが、錢が世の中を動かすようになる。

清兵衛、我が黒川家は、あと四、五年もすれば、富田家と結託した中浦村井家に押し潰されて、山も材木の商いも奪われてしまうだろう。だから自分は、大浜村井家を頼って、中浦村井家と富田家を牽制する。大浜村井家の家老に会い、中浦村井家が秘密にしている蓄財を暴露して、自分の企てを持ち込むつもりだ。その企てはこうだ。中浦の百姓の不満に火をつけて富田家の打ち壊しを決行させる。百姓が富田家の蔵で錢を見付けたら、蔵を封印し、見付かった錢が中浦村井家からの預かり金であることを証言させる。あるいはこうだ。打ち壊しの前に富田家に耳打ちをして、富田家の蔵に貯えられた錢を中浦村井家の屋敷に運ばせる。富田家の打ち壊しに行った百姓は、蔵に錢がなかったら、中浦村井家の屋敷を取り囲み、身動きを封じたところで、大浜村井家が即時に介入し、不正な蓄財を発見する。いずれにしても、富田家は打ち壊しに合い、中浦村井家は不正な蓄財を没

収されてお咎めを受ける。大浜村井家にとっても、我が黒川家にとっても望ましい筋書きだ。誰も死なない筋書きだった。

そうだ、自分は家老にあの企てを話した。だが、大浜村井家はこの筋書きを書き換えてしまった。大浜村井家は、中浦村井家と一揆を起しかねない百姓たちの両方を抑え込みたいのだろう。そこで、百姓一揆に中浦村井家を討たせることにした。大浜村井家が中浦の百姓たちの間に忠治と兵六を送り込み、浪人と偽って身分を隠した二人は、百姓の不満を煽り立て、百姓の国を作ると夢を見させて、一揆を起こさせた。一揆が勝てば、中浦村井家は倒され、大浜村井家が一揆を攻め滅ぼす。一揆が負けても、中浦村井家は不始末の責任を取らされる。

清兵衛、明日にも一揆が起きるかもしれぬ。自分は一揆が確実に勝てると思っていない。一揆が負ければ、自分は中浦村井家に潰されるかもしれぬ。だから清兵衛、自分はお前を呼び出して、富田家にあつた錢を大浜村井家に渡し、事態を解決しようとしているのだ。だが清兵衛、お前は錢を海に捨てたと言う。

清兵衛、聞いているのか。お前はそこに居るのか。もう立ち去ってしまったのか、それとも、最初から居なかったのか」

町田 いつかは今日のこととも思い返すと思う

久右衛門 「今日、鎮川の川辺にやって来て次郎を弔う男がいた。次郎が埋められた場所からは随分と離れた場所だったが。次郎を弔ったのか、兵六を弔ったのか、どちらでもないことだ。磔の難を逃れて中浦を脱け出した者が、次郎だったとしても、兵六だったとしても、大した違いはない。次郎は死ぬまで兵六と共にいたし、兵六は死ぬまで次郎と共にいた。今日、次郎を弔いに来たのは、兵六の遠い子孫だ。あるいは、兵六を弔いに来たのは、次郎の遠い子孫だ。もう百年も、いや千年も、何年か何十年かに一度、子孫たちが鎮川まで弔いにやって来る」

川口 優子や志郎がいなければ、優と幸せになれたかもしれない

久右衛門 「だがすべては忘れられてしまった。弔いに来る者は僅かで、その者たちも、何も分からずにやって来て、ただ手を合わせる」

町田 でも、今はすべてを忘れたい

久右衛門 「一揆のあと、何事も許さず、決して忘れようとしないうちがいた。すべてを許した上で、忘れなかった者もいた。多くの者たちは、月日が過ぎ、年を経るごとにすべてを淡々と忘れ去っていった。大浜村井家の領主や家老たちは、自分の手を汚さず、他人に人を殺めさせた者たちには、努めて一揆を忘れ去り、人々にも忘れさせようとした者も多い」

川口 そんな身勝手なことを思ったこともあつた

久右衛門 「あの者たちは皆、もう千年も前に死んでしまった。自分はどうだ。自分は死んでいるのか」

町田 森川のことは忘れたい

久右衛門 「自分は、自分の身勝手に軽率な企てが招いた結果を忘れていないし、悔やんでいる。自分がしたことを許してはいない。しかし、自分は一揆で大きな利権を手に入れておきながら、一揆で殺された者たちや、傷つき虐げられた者たちに、心から詫びて許しを乞うたことはない」

瀬戸 芝居を書くことで、始められることがある

久右衛門 「一揆の善悪は分からない。中浦村井家が滅び、大浜村井家が森川を治めるようになり、治水工事が進み、干拓地が増え、暮らし向きが良くなったという者も多い。我が黒川家も、一揆があったからこそ、長きにわたって山を守り、材木の商いを続け、森川に貢献することができたと思う」

町田 自分は前を向いて生きていきたい

久右衛門 「しかし、だからといって、あの朝、中浦村井家の屋敷にいた浪人や百姓たちを撃ち殺し、撫で斬りにしたことが、善きことだったと言えるのか。あの凄惨な光景の記憶を塗り潰そうとして良いものなのか」

瀬戸 でも、芝居を書くことで、終わってしまうこともあるのかもかもしれない

久右衛門 「そうだ、あの朝、次郎が磔にされたあの朝に生まれたサナの子供は、鬼彦という自分の名前や、禍々しい自分の出生と向き合って、一揆のことを繰り返し考え続けた。月日が経ち、下浦の人々が次第に干拓地の小作となり、森川と下浦の境がなくなり、一揆のことが忘れられていっても、自分の生き方を見失わず、貧しかった下浦の人々のために力を尽くした。そして、子や孫たちに、一揆のこと、清兵衛のこと、次郎のこと、サナのことを語り続けた。八十八の歳まで生きて、死んだときには孫や曾孫や玄孫たちが何十人もいた」

川口 今日のこの時間は、木霊のようなお別れの時間

久右衛門 (椅子に立てかけてあった杖を手に取り、客席をゆっくりと見回す)

「お前たちは私を知らないだろうが、私はお前たちのことを知っている」
(手にした杖で床を突き鳴らす。)

「お前とお前は鬼彦の遠い子孫だが、一揆のことなど何も知らないだろう」
(再び客席を見回してから、杖で床を突き鳴らす。)

「お前の遠い先祖は大浜の足軽百姓で、一揆の百姓を何人も斬り殺し、褒美をも

らった。切り殺された百姓の遠い子孫がお前とお前だ」

(再び客席を見回してから、杖で床を突き鳴らす。)

「お前の遠い先祖は、磔にされた次郎を槍で刺し殺した善八だ」

(しばらくの間、杖を手にしたまま俯いている。)

瀬戸 この芝居も終わっていく

久右衛門

「もうやめよう。この者たちの間には、繋がりが合う記憶も物語もない。それぞれの暮らしがあるだけだ。こうして役にも立たない繰り返りを続けている自分も、疾うの昔にあらゆる繋がりを失って、草臥れ果てた愚かな亡霊だ」

川口

もうこの本を読むことも、あの歌を歌うこともないでしょう

久右衛門

「誰か自分を殺してくれ。この場所に葬り去り、粗末な墓石を立ててくれ。未来永劫、こうしていると言うのか。自分には、もう、生きる歓びは与えられないのか。船の舳先に立ち、皆と未知の世の中に漕ぎ出していく、あの魂の高揚を味わうことはできないのか」

瀬戸

自分には分からないことばかりだ

久右衛門 「もうすぐ夜が明ける、最初の光だ」

久右衛門に当てられていたスポットライトが消え、舞台が暗くなる。

少しの間を置いてから、舞台と客席がゆっくりと明るくなり、すべてのキヤストが舞台に出て、客席に向かって一礼する。

|| 終 演 ||

(二〇二一年一月)